Osaka University Knowledge Archive

Title	絵本と子どもの人間形成論 ： 他者との邂逅の不可能性と可能性
Author(s)	久保田, 健一郎
Citation	大阪大学教育学年報. 2012, 17, p. 89-100
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8626
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

絵本と子どもの人間形成論
—他者との邂逅の不可能性と可能性—

久保田　健一郎

本研究は、絵本を通した子どもの成長について教育人間学的に考察し、絵本と子どもの人間形成論の構築を目指すものである。これまでの絵本研究は既存の学問領域に絵本を押し込め、その力を縮減してしまうものが多かったが、本論文は幼児教育を軸にしつつもその文脈に限定されずに絵本そのものの人間形成の力を掘り起こしていくものである。こうした意味で教育に関する概念を問い直す教育人間学的な立場からの人間形成論としての絵本研究である。すなわち、教育の観点から絵本を評価するのではなく、絵本の力から人間形成論を構築するのである。こうした立場から「他者との邂逅と帰還」をキーワードとして、模倣やおつかいなどについて論じていく。これらの分析から分かることは、他者との邂逅と帰還は主体を喪失した、偶然に委ねられた場面において生じるものであり、新しい意味世界が立ち上がることで成長していくのである。すなわち、他者との邂逅と帰還は不可能性を前提とした可能性しか有していないのである。

1. はじめに

本論文は、絵本を通した子どもの成長について教育人間学的に考察し、絵本と子どもの人間形成論の構築を目指すものである。

筆者は、これまで玩具を中心に据えて、遊びと子どもをテーマとして研究を進めてきた。そこでは、遊びと子どもの関係は普遍的であるが、近代に至って、そこに存在していたはずの他者との邂逅の契機は失われ、教育の文脈で語られるようになったことを明らかにした（久保田2007、2009など）。他方で、後に述べるように絵本はその出自からして近代的な装置であるが故、絵本と子どもの関係は教育の文脈で語られやすい。しかし、絵本を手にする子どもたちにとっては、その枠に収まらない人間形成を可能にしていると予想される。

故に、絵本を通した子どもの成長は狭義の教育学のアプローチでは語りきれない部分も多い。よって、教育に関する概念を問い直しながらの思索が不可欠であろう。よって、その意味ではそれらの概念を問い直す教育人間学的アプローチが求められる。こうした思索の果てに絵本と子どもの人間形成論の構築が可能になるだろう。こうして本論文は単なる絵本の教育論に止まらず、教育学が前提とする人間形成の問い直しまで射程に収めるのである。

2. 絵本とは何か

絵本をテーマとした論文では、絵本とは何かという問いが不可欠かもしれない。私たちが絵本と呼ぶ本は多岐に渡っており、明確な定義を拒むものではあるが、ここではニコラエヴァとスコットの論を参考に暫定的な定義を行う。

彼女らはラカンの理論から絵本の定義を試みる。ラカンがイメージが支配する想像界、言語が支配する象徴界、そこでは捉え切れない現実界について指摘したことは周知の事実である。彼女らはこの理論を引用し、

絵本とは「現実界」を描いたものであり、「想像界と象徴界、図像的記号と通常の言語記号を結びつけるという、これまでに他の文学が不可能だったことに成功している」（Nikolajeva, Scott 2001, p262）と述べている。

すなわち、絵本とは想像界と象徴界を接続し、現実界を表すものと定義できる。この意味では、絵本とは、子どもにとって想像界から象徴界への参入を助けるものであり、また自らが生きる現実界を指し示すものである。

ラカンから離れて、この事態を別の言葉で言い表してみよう。絵本は、子どもを動物の世界から人間の世界へと導く手助けになるものである[(1)]。ただ、子どもは一直線に動物の世界から人間の世界へと向かうのではなく、動物の世界と人間の世界が混濁した世界の中で彷徨いながら成長していくのであり、その際に道標になるのが絵本であろう。子どもは人間の世界に参入しながらも、絵本を通して現実に生きる世界は人間の世界では語り尽くせないことを学ぶのであろう。

以上、絵本を暫定的に抽象的なレベルで定義した。以下では、より具体的なレベルで考察していく。

3. 絵本における近代

本発表の冒頭で示唆したように、絵本とは歴史を超えて普遍的に存在しているわけではなく近代の歴史的産物である。本章では絵本における近代について論じていく。

①絵本小史

絵本研究の概説書や、保育内容の領域「言葉」のテキスト類に目を通すと、絵本の歴史が記されている。そこでは絵本の起源として、コメニウスの『世界図絵』が挙げられることが多い。また、子どもの本を研究するヒューリマンもコメニウスを「近代絵本の父」と呼んでいる（ヒューリマン1969, 83頁）。ヒューリマンは、コメニウスが教育を受けられない貧しい子どもたちのみならず、「抽象的な学問をぎっしり詰め込まれる上流社会の子どもたち」（同上, 87頁）の教育を問題視していたことを指摘した。こうした事実から『世界図絵』が子ども一般を読者としていたことがわかる。また、ヒューリマンは『世界図絵』を「絵に描かれた既知の世界、未知の世界が手のひら大の本となって目の前にある」と評している（同上, 88頁）。すなわち『世界図絵』が絵本の起源と呼ばれる所以として、その本が子どもを読者として位置づけたことと、絵によって全てを一冊の本に表したことが挙げられる[(2)]。

当然、そこにはフーコーが『言葉と物』で示した古典主義時代の表象世界の成立が挙げられるし（フーコー1974）、アリエスが『子供の誕生』で示した近代における子ども期の成立も挙げられる（アリエス1980）。フーコーはベラスケスの「侍女たち」の分析などから、ルネサンス期と異なり古典主義時代に入ると表象世界が独立したことを論じた。すなわち、『世界図絵』という本に全てが記されることで独立した表象世界が成立するのである[(3)]。また、アリエスは、芸術作品や子どもの遊びなどの分析から、子どもとは中世に胎動し近代において誕生したことを論じた。近代になると、大人と子どもが分離し、子どもが教育的配慮によって保護されることで、遊びや読み物は子どもに適したもののみが与えられるようになったのである。

また、現代の絵本の直接の源流を考える上では、19世紀のイギリスに注目すべきであろう[(4)]。そこでは印刷業者エドモンド・エヴァンズが重要な役割を演じる。美しい絵の本を子どもたちに与えたいと願っていた彼は、自ら多彩な色を表現できる印刷技術を開発することで、子どもの本の質を格段に高めた。また、彼はプロデューサー的な力も発揮し、ウォルター・クレイン、ランドルフ・コールデコット、ケイト・グリーナウェイを発掘し、代表的な絵本作家に育て上げた。それ以前もチャップブック、トイブックなどの挿絵が中

心の廉価な本があったが、この時期に至って絵と物語が調和した、子ども向けの近代絵本が完成したのである（三宅1994, 15-19頁）。

すなわち、古典主義時代の表象世界の成立や、中世に胎動し徐々に進んでいった子どもの誕生を思想的下地として、チャップブックなどが印刷技術の発達によって洗練されることで、近代の絵本が成立したのである。こうした背景はその後の絵本にも受け継がれ、絵本と子どもは決して切り離せないものとなっている。

②絵本における近代

前節では、絵本の歴史を概観し、絵本は近代の歴史的産物であることが明らかにした。絵本はこうした自らの歴史性を逃れられないが故に、内容的には近代的な規範を踏襲したものも目立つ。例えば、『ぞうのババール』や『おばけのバーバパパ』に見られるコロニアリズム、『げんきなマドレーヌ』に見られるジェンダーなど、ポストコロニアリズムやフェミニズムといった理論に慣れた耳にはナイーブに聞こえる話も多い。

ただ、他方でこうした直線的な解釈で十分かという疑問も残る。発表者は、アリエスや柳田国男の論から、子どもは近代的な概念であると同時に反近代的な思想も内包していることを論じたことがある（久保田2009, 164-165頁）。こうした子どもの反近代性は、彼らの遊びについての論考に顕著に見られ、アリエスによれば子どもには失われた過去が託されたのであり（アリエス1980）[(5)]、柳田国男によれば子どもの遊びには人類の過去が保存されているのである（柳田1998）。

だとすれば、絵本も同様な位置づけが想定できるかもしれない。また、子どもたちがババールやバーバパパの絵本を読んで、単なる近代的規範を学んでいるとも考えにくい。絵本そのものに、規範的な文脈を乗り越える可能性が潜んでいると想定できるだろう。故に、本論文では絵本のこうした可能性を掘り起こしていくことが重要となるだろう。

4. 絵本研究概観

本章では、現代おける絵本研究を概観していく。絵本研究は様々な領域で行われているが、中でも幼児教育、児童文学、美術論において多く見られる。

①幼児教育

まず、絵本研究において大きな割合を占めるのは、幼児教育の分野である。幼児教育において絵本は確固たる位置を得ている。幼稚園教育要領では領域「言葉」の「ねらい」において「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる」、「内容」において「絵本や物語などに親しみ興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう」と述べられている。また、「内容の取扱い」においても「その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」と述べられている[(6)]。

すなわち、幼児教育における絵本の役割は、想像力を養うことと、周りの人たちとの関係を築くことである。絵本は保育現場では読み聞かせによって、保育者や他の子どもたちとの関係づくりに使われたり、また物的環境の一つとしても扱われる。幼稚園教育要領解説書においても「皆で同じ世界を共有する楽しさや一体感」（文部科学省2010, 149頁）が挙げられているが、それは保育者の読み聞かせの場面を想定している。すなわち絵本とは、「言葉」の領域に止まらず「人間関係」や「環境」の領域に広がる総合的な保育実践なのである。

その他、家庭教育における絵本の役割も幅広く浸透している。絵本のガイドブックは数多く出版されているが、読者として保育者のみならず保護者も想定されている（福岡・磯沢2009、瀧2010など多数）。ここにおいても絵本は、子どもの感性を伸ばすことや親子の関係づくりなどが重視されている。

②児童文学、美術論、その他

幼児教育と同様に多く見られるのが、児童文学からのアプローチである。すでに述べたように現代の絵本の直接の源流は19世紀のイギリスであり、こうした経緯から英米児童文学の研究者が絵本について論じることが多い。これらは文学研究の方法論で行われることが多く、ピーター･ラビットで知られるビアトリクス･ポターなどの作家研究や、作品そのもの分析に徹するテクスト論的なアプローチが見られる。

また近年では美術論からのアプローチも見られ、そこでは絵本は視覚の芸術作品として分析される。従来の研究では、絵は物語を補完する域を出ないことが多かったが、絵そのものの力が注目され、分析の遡上に乗り始める。例えば中川素子は「絵本論も児童文学の枠組みから語られ」ているとし、「音楽、映像、演劇、歴史、科学などから、また特に現代美術のさまざまな考え方から絵本を見ていきたい。そのことが絵本や絵本論を“開かれたもの”にする」（中川1991）と述べている。

その他、近年ではこれらの視点を統合した絵本学も提唱されており、学際的に絵本を研究するという主旨から、1996年に絵本学会が設立され、研究紀要『絵本学』や機関誌『絵本BOOKEND』が発行されている。また、『絵本学』に付されている研究一覧を見ると、毎年絵本に関する膨大な論文や生み出されており、絵本研究は活況を極めていると言えるだろう。

5. 人間形成論としての絵本研究

①本論文の位置づけ

本章では本論文の立場を明確にしておく。本論文は幼児教育を軸にしつつも、その文脈に限定されずに絵本そのものの人間形成の力を掘り起こしていくものである。その際に、絵本は現代の幼児教育との間で不協和音を奏でるかもしれないが、その音は現代の人間形成の在り方を問い直す序曲として聴くことができるだろう。

幼児教育を軸として絵本を考える場合、幼稚園、保育所、家庭でどのように扱うべきかという観点が強くなりがちである。例えば、絵本のガイドブックは発達心理学の知見や保育所保育指針の発達過程区分に沿って、年齢、用途から絵本を子どもの周りに綿密に配置するものである。また、絵本の読み聞かせの役割を重視し、絵本を実体化せず、関係論的視点を貫いて描く研究もある（例えば、横山2009）。そこでは保育者、親、周りの子どもたちと並んで、絵本も一つの環境として分析される。絵本の内容よりも、保育者や親の読み聞かせ場面や、他の子どもの一体感といった「絵本体験」が重視される。

これらの配置的、関係論的アプローチは、保育現場や保育者養成にとってその有効性は疑いない。しかし、研究の観点から考えると、既存の学問領域に絵本を押し込め、その力を縮減してしまう危険がある[(7)]。現場と直結する理論ではなくとも、絵本の人間形成の力を純粋に取り出す作業も必要ではないだろうか。むしろそうした研究成果を保育者たちに提示し実践の問い直しを行うことが、より深遠な保育を可能にするのではないだろうか。

本論文は、こうした意味で教育に関する概念を問い直す教育人間学的な立場からの、人間形成論としての絵本研究である。教育を軸としつつも、教育の観点から絵本を評価するのではなく、絵本の力から人間形成論を構築するのである。そのためには絵本そのものの分析が求められるだろう。

②他者との邂逅と帰還

本節では絵本を分析していくわけだが、その手掛かりとして瀬田貞二が述べる「行きて帰りし物語」という概念を参考にする（瀬田1980）。瀬田によれば、子どもが喜ぶ物語には、ここことは異なる場所に行って帰ってくるという特徴がある。本論文は、この概念を「他者との邂逅と帰還」と読み替えて分析していく。ここことは異なる場所で、自らの力を超えたもの、すなわち他者と出会い、日常の世界に戻るということである。こうした経験が人間形成において重要な意味を持つと予想できる[8]。

さて、瀬田は「行きて帰りし物語」という発想の源泉として、マージョリー・フラックの『アンガスとあひる』を挙げている（瀬田1980、1985）。スコッチ・テリアのアンガスが生垣の向こうの不思議な音の正体を知りたくて逃げ出すが、音の正体であるアヒルに吠えたてられて追い返されるという話である。好奇心に溢れたアンガスは、紐が外れ、ドアが開いていることに乗じて表に飛び出して未知の世界に触れるが、自分の力を超えたアヒルの存在に慄き、家に帰ってくる。こうしてアンガスは「知ること」の怖さを実感する。「知ること」とは、他者との邂逅によって既知の世界が壊れることであり、恐ろしい経験である。アンガスはソファの下に隠れ、「さんぷんかん、なにごともしりたいとおもいませんでした」という言葉で本は閉じられる。

その他、同様な構造の絵本として、モーリス・センダックの『かいじゅうたちのいるところ』が挙げられるだろう。主人公マックスは、おかあさんに悪戯を怒られて寝室に閉じ込められる。すると次第に寝室は木に覆われ、マックスはボートに乗って「かいじゅうのくに」に辿りつく。マックスはその国の王様になるが、「かいじゅうおどり」の狂乱の後、怪獣たちの溺愛に慄いてしまう。次第に王様であるにもかかわらず寂しくなり、お母さんの温かい料理の匂いに誘われて帰還するのである。

アンガスもマックスも、生垣の外や「かいじゅうのくに」という自分の生きる世界と異なる世界に触れる。そこにはアヒルや怪獣という自分の力を超えた存在があり、これら他者は自らの生きる世界の変容を迫ってくる。こうした邂逅の後、暖かい日常生活に帰還するのである。

以下では、こうした他者との邂逅と帰還について掘り下げるために、いくつかのテーマから論じて行く。

1） 模倣

ここでは模倣をミメーシスという意味で扱い、人間による支配を超えた対象への接近と考える。対象に没入し、自らとは別の何かになりきるなどの意味である。このミメーシスは、従来は美学の中心的概念であったが、現代では近代教育を乗り越える概念として、教育学においても注目されている[9]。

この模倣をテーマとした絵本として、ジオンとグレアムの『どろんこハリー』を論じてみる。『どろんこハリー』は、黒いぶちのある白い犬ハリーの話である。ハリーは大嫌いなお風呂に入れられそうになり、ブラシを裏庭に埋めて家から逃げ出す。ハリーは工事中の道路、線路の橋の上、石炭トラックの滑り台で好き放題遊んだ揚句、白いぶちのある黒い犬になってしまった。そんなハリーが家に帰っても誰もハリーと認めてくれない。しかし、ブラシを掘りだしてお風呂でみんなに体を洗ってもらうことで、再び黒いぶちのある白い犬になり、自分がハリーであることを気付かせる。そして、大好きな布団の上ですやすや眠るのである。

このように、ハリーは遊びに没入することで、黒いぶちのある白い犬から白いぶちのある黒い犬になる。そこでは自らの色と同様に世界が反転し、ハリーの周囲にはこれまでとは別の意味世界が立ち上がる。その新たな世界では、嫌いなはずのブラシが異なった意味を持った物としてハリーの目の前に迫ってくる。そのブラシを使用することによって、再び新たな意味世界が立ち上がる。ハリーは再反転して黒いぶちのある白い犬になるが、そんなハリーに張り巡らされた意味世界はもとの世界とは異なっている。何故なら、ハリーは最後には「ふとんのしたにかくしたかたいブラシもちっともきになりませんでした」という状態になり、

ハリーにとってブラシは親しい物となるのである。

すなわち、ハリーは、別の何かになりきることを通して新しい世界を手にしたのである。ハリーは遊びへの没入という日常的な行為の中で、より豊かな世界で生きることを可能にしたのである。

2）おつかい

おつかいは日常的な行為であるが子どもにとっては大冒険であり、他者との邂逅と帰還の例と想定できる。ここでは、筒井頼子と林明子の『はじめてのおつかい』について論じていく。

『はじめてのおつかい』は、５才の女の子みいちゃんがお母さんの代わりに牛乳を買ってくる話である。みいちゃんにとって、はじめてのおつかいは大冒険である。ベルを鳴らして疾走する自転車を避けたり、落とした小銭を探したりして、やっと店に辿り着く。店に着いても、店のおばさんを呼ぶ声は車の音にかき消されてしまうし、たばこを買うおじさんやパンを買うおばさんに先を越されしまう。牛乳を買っても、おつりをもらうのを忘れてしまう。やっとのことで家路に着くと、坂道の下で赤ちゃんを抱っこしたお母さんが手を振って迎えるのだった。

この絵本は暖かな日常生活の風景で幕を開けるが、この温もりにはみいちゃんがおつかいを頼まれることで亀裂が入る。みいちゃんは掃除機、薬缶、魔法瓶、鍋、長葱、卵といった数々の物に囲まれた、親しみのある世界を後にしなければならない。一歩外に出ると、新しい世界がみいちゃんの周囲に立ち上がる。隣の犬がみいちゃんを見守るが、そんなことは知る由もない。小銭を落としたときにすりむいた膝の痛みは新しい世界を硬直させ、みいちゃんを不安に陥れる。店はパン、チョコレート、キャラメルコーンといった親しみのある物に溢れているが、みいちゃんにはいつもとは異なるよそよそしい物として迫ってくる。こうして新しい世界を経験したみいちゃんは、お母さんのもとに帰ってきて、再び日常生活を生きていく。その日常に立ち上がる世界はおつかいに行く前より重層的になっているのである。

裏表紙には、お母さんに抱っこされて哺乳瓶でミルクを飲む赤ちゃんと、膝に絆創膏を貼ってコップでミルクを飲むみいちゃんの姿が描かれている。それは、みいちゃんが他者との邂逅によって傷つきながらも帰還し、より豊饒なる世界を手にしたこと、そして赤ちゃんもこれからみいちゃんと同様に他者との邂逅と帰還を反復して成長するに違いないということが表現されているだろう。

③他者との邂逅の不可能性について

前節では、絵本における他者との邂逅と帰還を描いてきた。このように見てくると、他者との邂逅と帰還は絵本の中に溢れており、日常生活においても容易に可能なものと思えるかもしれない。

しかし、数多くの絵本を読み込むと、こうした描写に成功しているものは限られていることがわかる。すでに述べたように、古典的な絵本は規範的な内容も多いわけだが、そのことは冒頭の絵本の定義に戻れば、人間と動物の混濁の世界を描くはずの絵本が、人間の世界を描いているということであろう。むしろ、混濁の世界を描いているのか人間の世界を描いているのか、判断に難しい絵本が多数を占めているように思われる。

以下では混濁の世界と人間の境界に位置する作品を分析していく。それは他者との邂逅の不可能性と可能性について論じることにつながるだろう。以下の二つの作品は、強くなりたい男の子という共通のテーマを有している。このテーマから、他者との邂逅の不可能性と可能性という新たな問題を論じて行くことになる。

1）小さなライオン

まずは、マレーク・ベロニカの『ラチとライオン』を取り上げる。世界中で一番よわむしの少年ラチは、

飛行士を目指している。そんなラチが朝起きたら、ベッドの側に小さいけど、とても強いライオンがいた。ラチはそのライオンと一緒に様々なトレーニングを積む。すると、ライオンと一緒なら恐い犬の傍らも通り抜けることができるし、暗い部屋にも行けるようになった。ある日、ライオンとけんかの練習をしてついに勝利を収めた。そして、ポケットの中のライオンを心の支えにして、友達がいじめっ子に奪われた買ったばかりのボールを取り戻した。しかし、ポケットの中を見るとライオンではなくリンゴが入っていたのだった。ライオンは「ぼくはこれからよわむしのこどものところにいって、つよいこどもにしてやらなくちゃならないんだ」という手紙を残して、ラチのもとを去っていたのである。

ここでの小さなライオンの解釈は両義的であろう。まずは、小さなライオンを他者と解釈することもできるかもしれない。ラチが自らの力を超えた他者としてのライオンと邂逅することで、これまでの世界が変容し、新しい意味世界を手にしたという解釈も不可能ではない。

しかし、この絵本をこうした解釈で満足することは不十分に思える。むしろ、小さなライオンは他者ではなく、すでに知っていたものと解釈する方が妥当ではないだろうか。すなわち、小さなライオンは、よわむしの男の子が強くなりたいという男性中心主義的な価値観を象徴したものであり、ラチとライオンとの出会いは、他者との邂逅ではなく既知のものとの再会という解釈が自然かもしれない。ポケットに入れた小さなライオンは、性器の如く男の子の自意識を満たしていたに過ぎないのではないか。このような既知のものとの再会は、世界の変容を起こすことはなく、むしろ世界を固着させてしまうのである。小さなライオンは、他のよわむしの男の子のもとに行って、男性中心主義を根付かせるのであろう。

筆者はこの絵本が男性中心主義な価値観を踏襲しているだけと批判しているのではない。この絵本から理解できることは、他者との邂逅と帰還の不可能性である。自分では他者との邂逅と帰還を経験し成長を遂げたと思っていても、実際は既知のものとの再会と現状の意味世界の固着に終わっていることが多いのではないか。ラチは小さなライオンと出会うことで自分が大きな成長を遂げたと思っているかもしれないが、実際はその成長は今までの世界の延長や拡大であり、その世界を硬直させたに過ぎなかったのである。

2）強靭な “Willy”

他者との邂逅の不可能性と可能性について考察するために、もう一つの絵本を挙げてみる。それはアンソニー・ブラウンの『こしぬけウィリー』である。

「すいません、ごめんなさい！」が口癖のウィリーは、自分が強くなることを夢見ていた。ある夜、ウィリーは広告で強くなるための本を見つけ、その本を読んでトレーニングをするようになった。ジョギング、たくさんのバナナの食事、エアロビクス、ボクシング、ボディービル、ウェイトリフティングなどをして、どんどん強くなっていった。そんなとき、いじめっ子からミリーという女の子を助け、「あなたはわたしのえいゆうよ、ウィリー」と言われるようにまでなる。しかし、電柱にぶつかった際には、今でも「すいません、ごめんなさい！」と言ってしまうのである。

この絵本の解釈も両義的である。例えば、灰島かりは、この絵本がひとつの解釈に収斂させることを拒み、また最後の場面で元に戻る「円環構造」にあることから「ポストモダン」の絵本と位置づける。そして、こうした絵本が書かれた所以として「〈成長〉という物語が現代ではゆらいでいるからだろう。〈成長〉は近代ヒューマニズムの物語であり、ヒューマニズムの根幹を支える近代的な人間観が、現代ではほころびししまった」（灰島2006, 57頁）と述べている。

こうした解釈の魅力は十分に理解しながらも、筆者はこの絵本を近代的な成長物語を乗り越えていると評価することには抵抗がある。ウィリーの洒脱なプレッピー・スタイル、ジョギングの際に履くピンクのニュー

バランス、円環構造で多様な解釈に開かれた物語を考慮しても、絵本の中盤に描かれる男性的な成長物語を払拭するまでには至らないだろう[11]。

主人公の名前 “Willy” が男性の性器を意味していることは周知の事実だが、それは男性として生まれたウィリーが、男性中心主義的な価値観を乗り越えられないことを予想させる。こうした読者の予想通り、ウィリーは強靭な男性像に向って突き進み、階段を上るようにして成し遂げて行く。ウィリーが電柱にぶつかり謝る最後の場面は、固着した意味世界に挿入された雑音であり、他者との邂逅の契機になるかもしれない。しかし、おそらくその雑音はウィリーを新たな意味世界へと導くものではなく、克服すべきものに過ぎないのではないだろうか。

こうした意味で、ウィリーの成長は世界の変容ではなく世界の拡大であり、最後の場面は植民の果てに支配し切れなかった部分が未だ存在するということに過ぎないであろう。ウィリーは絵本が閉じられた後も、より強靭な “Willy” を手に入れるために成長物語の階段を上り続けるのかもしれない。

④他者との邂逅の不可能性と可能性

これらの作品は他者との邂逅と帰還の不可能性を現わしていると考えられる。では、ラチやウィリーの経験は、前述のハリーやみいちゃんの経験と何が異なるのだろうか。それはハリーの遊びやみいちゃんのおつかいには主体が存在しないということであろう。ハリーはお風呂が嫌で我を忘れて遊んだのであり、みいちゃんはたまたまお母さんからおつかいを頼まれたのである。このように主体を喪失した偶然に委ねられた場面において他者との邂逅と帰還という出来事は生じるのであり、新しい意味世界が立ち上がることで成長していくのである。すなわち、他者との邂逅と帰還は不可能性を前提とした可能性しか有していないのである。

さて、ラチとウィリーの経験をもう一度考えてみよう。確かに、ラチとウィリーの経験は主体の意図のもとで行われたものであり、他者との邂逅と帰還による世界の変容ではなく、既知のものとの再会による世界の拡大であり、固着、硬直であり、強靭化である。では、ラチとウィリーの経験を望ましくないものとして排除すべきだろうか。おそらく、そうではないだろう。これらの絵本の中には他者との邂逅の契機が詰まっているのである。例えば、ラチとライオンの別れの場面は、ラチの世界の変容の契機となるかもしれない。また、ウィリーの電柱への衝突という雑音も、これから新たな意味世界が立ち上がる契機となる出来事かもしれない。こうした絵本は、ストーリーとしては世界の固着に終わっていても、細部において次なる他者との邂逅と帰還の可能性を指し示しているのではないか。

6. おわりに

冒頭で述べたように、本論文の目的は、絵本を通した子どもの成長について教育人間学的に考察し、絵本と子どもの人間形成論の構築することにあった。また、本論文は単なる絵本の教育論に止まらず、教育学が前提とする人間形成の問い直しまで射程に収めるものであること、そして、現代の幼児教育との間で不協和音を奏でるかもしれないが、その音は現代の人間形成の在り方を問い直す序曲として聴くことができることも述べた。

こうした目的で考察を進める中で、絵本における人間形成の特徴として他者との邂逅と帰還を挙げ、その人間形成的意義を探ってきた。その意義とは、こことは異なる場所で自らの力を超えた他者と出会い、これまでの世界に亀裂が入り、再び戻ってくることで新たな意味世界が立ち上がることである。それは既知のものとの再会による世界の拡大や固着と異なり、世界の変容をもたらし、日常生活をより豊饒なものにしていくのである。

ここで重要なことは、この他者との邂逅と帰還は不可能性の中にしか可能性がないこと、すなわち人間の力を超えてなされるということである。近代以降の教育学は、人間の力に頼って思索や実践を重ねてきた。教育を語る際には、ときにはヘルバルトのように大人の教育方法の問題へと、ときには新教育運動のように子どもの自己活動の問題へと収斂していった。しかし、他者との邂逅と帰還とは、こうした人間の力によって生じるものではなく、主体を喪失し偶然に委ねられた、人間の力を超えた場所で生じるものである。人間の力に頼れば既知のものとの再会の域を出ないことは、すでに述べた通りである。

絵本はこのような人間の力を超えた場所の描写を可能にしていると考えられる。その理由は以下の通りである。冒頭の定義に戻れば、絵本は人間と動物の混濁の世界を描いている。この混濁の世界は、言語でもイメージでも表現できないことが表現されている世界である。何故なら、絵本とは、言語とイメージの二つの世界の相克の中で表現されている芸術形式だからである。例えば、読み聞かせの場面では、大人は言語を重視し、物語に沿って話を進めようとするが、子どもはイメージを重視し、同じ絵に執拗な愛着を抱いたり、同じ本を繰り返し読むようにせがんだりする。子どもが一人で読む場合も、子どもはページを順番に捲るのではなく、絵と言葉を自在に操りながら独自の読み方をしているだろう。こうした言語とイメージの相克の中で、絵本は人間が現実に生きる混濁の世界を表現することを可能にしているのではないだろうか。そして、こうして描かれた混濁の世界にこそ、豊饒なる日常生活を見ることができるのであろう。

近年、教育を巡る議論は耳障りな怒号ばかりであり、日々の地に足のついた実践が切り刻まれようとしている。しかし、子どもたちが生きる世界はすでに豊かなものであり、この大地を掘り起こすことが重要であろう。騒々しい政治がどんな政策を打ち出すよりも、保育者と子どもが一冊の絵本を読むことの方が有意義であり、子どもたちに豊かな人生を用意するものだろう。

【注】

(1) この人間と動物という図式は、絵本研究では矢野智司が使っている（矢野2002）。またこの図式については、筆者はアガンベンに最も影響を受けている（アガンベン2004など）。

(2) ヒューリマンは「これまで、子どもとか人間教育の分野で決定的な仕事をした偉大な人物のうちただの一人も、子どものための本を作っていない。ルソーも書いていいなければ、ペスタロッチも書いていない。・・・しかし、コメニウスは教育者、偉大な創始者として、いまなおけっして忘れられていない」（前掲書、91頁）と、コメニウスが子ども向けの本を作ったことを絶賛している。

(3) この点に関して、ヒューリマンも『世界図絵』を「当時の哲学の理念が民衆のために作りだしたもの」（前掲書、91頁）と言っている。

(4) 児童文学者のリリアン･H･スミスも「絵本の伝統は、比較的短い。私たちが考える意味での近代的な絵本は、前世紀の最後の二十五年間にはじまった」（スミス1964, 209頁）と述べ、続けてクレイン、コールデコット、グリーナウェイの名を挙げている。

(5) アリエスは「子どもは最も守旧的な人間社会を構成している」と述べている（前掲書、66頁）。

(6) なお、保育所の保育内容を示す保育所保育指針でも同様ことは述べられている。また、以前は領域「表現」でも記載はあったが、2008年の大綱化に伴って削除された。その他、幼稚園教育要領の前身である1948年の「保育要領」では、保育内容は多岐に渡っていたにもかかわらず、絵本についての項目はなかったことも注目に値するだろう。

(7) こうした縮減の典型として、阪本一郎の『絵本の研究』が挙げられるだろう（阪本1977）。この研究は、50冊の絵本を選び（その選択の基準も曖昧である）、5名の評価者が主題、構想、性格描写、叙述、描画、印刷・造本といった評定尺度からそれぞれの絵本を点数化し、その点数を合算して順位づけするものである。筆者が読んでいても不毛な印象をもたざるを得ない本であるが、三宅興子はその絵本の順位表から「この研究がいかに無意味なものであるかを雄弁に物語っている」（三宅1994, 242頁）と酷評している。

(8) 人間形成における他者との邂逅の重要性への指摘は多いが、代表的な論として、加藤守通はプラトンの洞窟

の比喩が「われわれ人間の存在は人間を超えたものとの本質的な関わりを持っており・・・この関わりこそが人間形成を成り立たせる基盤であるということ」（加藤2004, 11頁）を示しているとしている。

(9) ミメーシスに関しては発表者も詳しく論じたことがある（久保田2003、2005）。その他、近代教育を乗り越える人間形成を模索する中で、ミメーシス概念は多用されている（Gebauer／Wulf 1992など多数）。

(10)その他模倣をテーマとした作品では、レオ＝レオニの『じぶんだけのいろ』や西巻芽子の『わたしのワンピース』も注目に値する。

(11)筆者と同様にスピッツも「この絵本をどのように読もうとも、・・・一般的なマッチョなイデオロギーに臆面もなく肩入れしていることは明らかだ」（スピッツ2001, 270頁）と述べている。

【引用文献・主要参考文献一覧】

アガンベン, G.　2004 『開かれ』岡田温司他訳　平凡社。
アリエス, P.　1980 『「子供」の誕生　アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』杉山光信他訳　みすず書房。
加藤守通　2004 「人間形成の地平（その１）　―人間形成の地平論の課題―」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』Vol. 53-1. 1-22頁。
久保田健一郎　2003 「ミメーシスによる教育の再構築　―野生児についての語りを手がかりに―」『教育哲学研究』Vol. 87　67-82頁。
久保田健一郎　2005 「人間生成論研究序説　―自然・美・ミメーシス―」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要 Vol. 31　161-178頁。
久保田健一郎　2009 「明治期における子ども観の成立」『教育人間学の展開』北樹出版　162-177頁。
阪本一郎　1977 『絵本の研究』日本文化科学社。
スピッツ, E. H.　2001 『絵本のなかへ』安達まみ訳　青土社。
スミス, L. H.　1964 『児童文学論』石井桃子他訳　岩波書店。
瀬田貞二　1980 『幼い子の文学』中央公論新社。
瀬田貞二　1985 『絵本論』福音館書店。
瀧薫　2010 『保育と絵本』エイデル研究所。
谷本誠剛・灰島かり編　2006 『絵本をひらく』人文書院。
中川素子　1991 『絵本はアート』 教育出版センター。
ヒューリマン, B.　1969 『子どもの本の世界　300年の歩み』野村泫訳　福音館書店。
フーコー, M.　1974 『言葉と物　―人文科学の考古学』渡辺一民他訳　新潮社。
福岡貞子・磯沢順子編　2009 『乳児の絵本・保育課題絵本ガイド』ミネルヴァ書房。
三宅興子　1994 『イギリス絵本論』翰林書房。
文部科学省　2010 『幼稚園教育要領解説書』フレーベル館。
柳田国男　1998 「小さき者の声」『柳田国男全集　第七巻』筑摩書房　99-208頁。
矢野智司　2002 『動物絵本をめぐる冒険　動物　―人間学のレッスン』勁草書房。
横山真貴子　2009 「５歳児における絵本体験の特徴」『奈良教育大学教育実践総合センター紀要』Vol. 18　23-32頁。
Aruzpe, E. /Styles, M. : Children Reading Pictures Routlege.
Gebauer, G. /Wulf, Ch. : 1992, Mimesis. Kultur-Kunst-Gesellschaft, Reinbek.
Nikolajeva, M. /Scott, C. : 2001, How picturebooks Works, Routlege.
Sipe, R. /Pantaleo, S. : 2008 Postmodern Picturebooks, Routlege.
Colomer, T. /Kümmerling-meibauer, B. /Silva-diaz, C. : 2010, New Directions in Picturebook Reseach, Routlege.

【引用絵本一覧】

ジオン, J. 、グレアム, M. G.　1964 『どろんこハリー』渡辺茂男訳　福音館書店。
センダック, M.　1975 『かいじゅうたちのいるところ』神宮輝夫訳　富山房。
フラッグ, M.　1974 『アンガスとあひる』瀬田貞二訳　福音館書店。
ブラウン, A.　2000 『こしぬけウィリー』久山太市　評論社。
ブリュノフ, J　1974 『ぞうのババール』矢川澄子訳　評論社。
ベールマンス, L.　1972 『げんきなマドレーヌ』瀬田貞二訳　福音館書店。
ベロニカ, M.　1965 『ラチとライオン』徳永康元訳　福音館書店。
レオ＝レオニ　1975 『じぶんだけのいろ』谷川俊太郎訳　好学社。
西巻芽子　1969 『わたしのワンピース』こぐま社。
筒井頼子、林明子　1976 『はじめてのおつかい』福音館書店。

Human formation theory of the picture book and the child: Possibility and impossibility of encounter with others

KUBOTA Kenichiro

The purpose of this paper was to consider the growth of a child through a picture book from the standpoint of educational anthropology as well as construct a human formation theory. Most of the previous studies have applied a picture book to the existing discipline. However, in this paper, we explained the power of human formation in a picture book without emphasizing on preschool education. We therefore examined a picture book using human formation theory in light of educational anthropology. Our goal was not to evaluate a picture book from an education standpoint but to construct a human formation theory from a picture book perspective. From this standpoint, we dealt with mimesis and shopping with the keywords "the encounter with others and return". Our findings revealed that "the encounter with others and return" occurred occasionally, and the children received a new world. This supports what has been said about "the encounter with others and return" having possibility on the grounds of impossibility.